第一回 リスナー参加型

天下一学問会

高校レベル

問題用紙

国語

作問者：（非公開）

問題数：大問三問

記述式

解答時間：六十分

注意事項

一．解答は専用フォームから行うこと

難易度：普通

目標点数

金：八〇点
銀：六〇点
銅：四〇点

次ページより問題を掲載

現代文問題

第一問　以下の四字熟語の意味をそれぞれ簡潔に説明せよ。

（ア）　豪放磊落

（イ）　勧善懲悪

（ウ）　四面楚歌

（エ）　諸行無常

第二問　次の文章は小説『81』の序文である。次の文章を読み以下の問いに答えよ。

立川が死んだという知らせを岡田が聞いたのは一週間前の事だった。

最初に電話を回してくれたのはやはり同じサークルに入っていた高村だった。彼は岡田が電話に出るなり、

―立川が死んだ。

と、動揺を一切隠さずにそう、端的に言った。岡田はその時東京の恵比寿にある職場にいて、詳しく説明を聞くことができなかったからすぐに電話を切り、またかけなおすことにした。しかし、そういう日に限って断れない残業がある。結局夜の9時頃まで自分の持ち場から離れることができず、彼が携帯電話を見ることができたのは帰りの電車の中だった。高村からは長文の連絡が入っており、立川が急死したこと、通夜と葬式の日程が遺族から高村のところに送られていること、そして、そこには将棋サークルの同期だった自分も呼んで欲しいと書いてあった。

それを見て、(1)岡田はなぜか酒が飲みたくなった。最寄り駅から自宅に歩く途中にあるコンビニに寄って、ストロングゼロのロング缶を二つ購入して高村へ返信の文章を送ることも忘れてそれを(2)煽るように飲んだ。普段はプライベートで酒を飲むことは少ない岡田だったが、その日に限っては違っていた。翌日は安酒特有の二日酔いが頭を刺す中での出勤だったが、岡田はそのことはどう

でもよいかのようにふるまった。昼休みに携帯を開くと「来れるのか？」という出欠を急く高村からの連絡があったから、「いける」と返信を出した。

だから今、岡田は東京発の東海道新幹線の中にいる。真っ白に身体を光らせた新幹線が東京駅のプラットフォームを滑り出すと、すぐにアナウンスがあった。2022年になっても相変わらずこの世の中を(3)縛り付けている新型コロナウイルスは、今日も人々にストレスと不便を強い続けている。ただマスクとソーシャルディスタンスのお願いのアナウンスも、岡田にとっては既に聞きなれたものだった。

窓の外を見ると都心のぎらぎらとした摩天楼とは対照的に空はどんよりとしている。重く湿った暗い雲だ。天気予報はこれから雨の予報になっている。都会の空はただでさえビルに覆われて圧迫感があるのに、そこに雲が加わって陰鬱な気分を(4)醸し出している。

ゆっくりと後ろに流れている雲を眺めながら岡田は、不思議なほど落ち着いていることに気が付いた。まがりなりにも4年間の時を共に過ごした友人が亡くなったのだから、もう少し、悲しみとか怒りとか動揺とか、そういった激情が身体の中を渦巻くものだと思っていた。それを聞いた初日は少し動揺もあった。しかし、今東海道新幹線に乗っている彼はそのような感情が少しもなくなってしまっていることに気が付いていた。

ここで岡田は、昨日の残業の疲れが身体を蝕んでいることに気が付いた。有休を取得する代わりに休む間にこなさなければならなかった業務を、事前にすべて終わらせなければならなかったのだ。それで結局昨日も一昨日も終電まで会社で作業をしていた。だから数時間寝たかどうかも分からない。葬式の荷造りもしなければならなかったから、家に帰ってすぐ風呂に入って寝るというわけにもいかなかった。

中学、高校と将棋部で過ごしてきた岡田は大学でも迷わず将棋サークルを選んだ。ただ岡田自身は将棋が好きだったというよりは、将棋をやっている連中と駄弁ったり遊んだりすることが好きで、将棋そのものを熱心に勉強する、といったような感覚は持ち合わせていなかった。

だから、将棋サークルに入ってもあまり将棋を指すという事は少なかった。部室に何となく集まって麻雀をしたりボードゲームをしたりして過ごし、週末の夜になればスーパーで安酒を買って友人の家で酒盛りをして過ごしていた。成

績と単位は常にもう少しで落第というところであったが、それは大体将棋サークルに入り浸って授業に行かなくなってしまうからというのが原因であった。

立川はその中の一人、ということになる。お世辞にも顔が広いとは言えない岡田にとって、彼は数少ない友人の一人だった。その彼が亡くなったという。(5)窓の外を眺めると既に収穫が終わった後の田園がひたすらに広がっていた。晴れていれば富士山が見えているだろうことを岡田は知っていてなんとなく外を見たが、そこには東京の空よりもずっとどんよりとした雲が空の端から端までを覆っていて、雨粒がガラスをたたきつける音がわずかに聞こえる。空調がしっかりしている新幹線の中にもなんとなく雨の匂いがする。

問一　傍線部(2)～(4)について、本文中における意味として最も適当なものを次の選択肢からそれぞれ一つ選べ。

(2) 煽るように

① 一息に勢いをつけて
② 焚きつけるように
③ 仕向けるように
④ 誘うように

(3) 縛り付けている

① 苛立たせる
② 限定している
③ 自由を奪っている
④ 制限されている

(4) 醸し出している

① 情緒がある
② イメージしている
③ 風情がある
④ 雰囲気を作っている

問二　傍線部(1)において「岡田はなぜか酒が飲みたくなった。」とあるが、岡田はなぜ酒を飲みたくなったのか。下の選択肢から最も適当なものを一つ選べ。

① 立川が死んだことを受け入れられず、現実を忘れようとするため。
② 立川が死んだことに動揺し、それに対応するため。
③ 立川が死んだことに対して冷静になってしまった自分が受け入れられず、現実から逃れるため。
④ 立川が死んだことに対して様々な負の感情が渦巻き、混乱してしまったため。

問三　傍線部(5)「窓の外を眺めると既に収穫が終わった後の田園がひたすらに広がっていた。晴れていれば富士山が見えているだろうことを岡田は知っていてなんとなく外を見たが、そこには東京の空よりもずっとどんよりとした雲が空の端から端までを覆っていて、雨粒がガラスをたたきつける音がわずかに聞こえる。」とあるが、この時の岡田の感情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

① 立川が死んでしまい悲しみに暮れた自分の感情を曇天が広がる車窓と重ね合わせている。
② 立川が死んでしまい悲しみに暮れた自分の感情を理解し、陰鬱な気分になっている。
③ 立川が死んでしまったにも関わらず落ち着き払っている自分の状態が理解できないでいる。
④ 立川が死んでしまったにも関わらず落ち着き払っている自分の状態を理解し、陰鬱な気分になっている。

第三問　次の文章は小説『真夏のピアノソナタ』の一節である。現代の宮城県仙台市を舞台とし、高校生である主人公の「ぼく」は放課後に同級生の悠花と音楽準備室で下校までの時間を過ごすようになった。本文は、高校二年生の夏休みが終わったところから始まる。これを読んで後の問いに答えよ。

夏休みが終わると、空はどんどん高くなっていく。仙台平野の夏は終わりが早い。テレビの天気も話題の中心が残暑から秋へと変わっていき、宮城野の田んぼで育てられている稲穂がゆっくりと黄金色に変わっていくのが、毎日の電車の中で分かるようになっていく。夏の高揚感が次第に薄れていき、西に見える奥羽山脈が初めて雪化粧をしたころ、ぼくらの制服も衣替えになった。

将棋部の連中は夏休みの間、東北大会まで行ったらしい。将棋の実力はとんと分からないのだが、県代表というのはどれほどのものなのだろうか。本人たちに聞いてみると可もなく不可もなしといった感触だった。一つのことに熱中できる凄さを彼らは持っていると感じた。ぼくは、何もやっていないし、これから何かするわけでもない。

そもそも、変化はいらない。ぼくは(1)淡々と変わらない日々を送りたいだけだ。このまま大学に進学して淡々と就職して、老いて死ねば良いと思っている。稀に欲がない、などと叱られるが別にそれで良いのだ。

ぼくはというと、相も変わらず音楽準備室で放課後に漫画を読んでいる。このままいけばおそらく、秋の中間考査の成績も真ん中くらいになるだろう。ふと見上げると採光の悪い準備室の窓からも高くなった空がよく見える。心地よい風がそこからふわふわと入り込んできて、ピアノの前に座っていた悠花の髪を揺らした。

悠花はピアノの音に合わせて歌を歌っている。両手を別々に動かしながら歌を歌うなんて器用なことが良くできるものだと思う。久しぶりの悠花の冬服は小柄な彼女の身体に良く似合っていた。

「ん？どうしたの？」

横顔がこっちを見た。いや別に、と答えてみたが、しっかりとした返答になっただろうか。こういうときに(2)変に勘ぐったりしないのは助かると思う。

「そういえばさ、高瀬くんも分かるような曲をいくつか練習してみたんだよね」

悠花が髪をかき上げてピアノの前に座りなおす。弾き始めたのは、有名な子供向けアニメ映画の曲だった。その映画は小さいころに観て以来一度も見なかったけれど、街のどこかで流れていて耳に入っていた曲。鍵盤から奏でられる音は透き通った秋の空気と教室のほこりっぽさと混ざり合っていった。

「どうだった？」

少し照れくさそうに悠花がこちらを向いた。

そういえばとふと思った。(3)悠花はどうして準備室なんかにいるんだろう。悠花とぼくはそもそも違うクラスだ。ぼくは理系進学を選び悠花は文系進学を選んだ。ウチの学校はどういうわけか文系クラスと理系クラスで通う校舎が違う。だから悠花の姿をぼくは登校から放課後まで見ることはほとんどない。当然、同じ授業になるようなこともない。

悠花がクラスの人間関係に困っているようなタイプの人間でもなさそうだし、放課後には部活に通っていてもおかしくない。それにも関わらず曜日を合わせてはここにきて、ピアノを弾いて帰っていくのである。

あの日以来、彼女は時折ぼくに甘えてくるようになった。普段はピアノを弾いていつも通り過ごしているのだけど、たまにこちらのほうをじっと見つめてくることがある。それにぼくが気づいて漫画本から目を上げると、

「えへへ」

と少し照れながら身体を寄せてくる。秋になって少し涼しくなったから、悠花の体温が心地よい。最初の方はどうすればいいかよくわからなかったけれど、途中から頭を撫でたり肩を寄せたりすると、悠花はますます喜ぶことがわかった。身体を寄せ合っているときはお互い余り話すことがなかった。

特別な言葉を交わしあうことが悠花とぼくの間であったわけではなかった。ただあの日以来、(4)明らかにぼくたちの関係は今までとは違ったものになった。悠花の体温を感じ取ることがぼくの中でとても重要なことに変わっていき、おそらくそのことは彼女も同じはずだった。正面から抱きしめられると、そばにいることによる安心感がより確かなものへと変わっていき、全身にじわじわと広がっていく。

ぼくと悠花の間で何か起こるというわけでもない。ただただ、身体を一緒にしているだけで得られるものがあった。淡々としていたが、とても貴重な時間だった。

そして少し時間が経つと、また特に言葉を交わすこともなく悠花はピアノの前に、そしてぼくは漫画に戻っていく。(5)傍から見たらそれはとても奇妙な営みだったと思う。悠花はピアノの曲やクラスのことや家族のことをぼくに話して、それにぼくは受け答えをする。

すると、あっという間に18時がやってくる。そうするとかばんをもって制服を整えて、ぼくと悠花は駅までのバスへ乗る。部活終わりのたくさんの生徒たちに交じって、くだらないことを話しながら駅までの時間を過ごす。帰りの電車は悠花が下りでぼくが上りだから、そこでお別れだ。

問一　傍線部(1)「淡々と変わらない日々を送りたい」とあるが、それはなぜか。「ぼく」がそう考える理由として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選べ。

① 将棋部に所属する生徒のように一つの物事に対して熱中する欲が「ぼく」にはなく、変化がある日常を必要としていないため。

② 将棋部に所属する生徒が勝利に向けて努力しているように、目標に向かって進む気力が「ぼく」には存在せず、変化がある日常を必要としていないため。

③ 将棋部に所属している生徒が参加したような特別な行事を「ぼく」は不必要なものだと考えているため。

④ 変化のある日常は「ぼく」にとってストレスであり、可能な限り避けたいと考えているため。

問二　傍線部(2)「変に勘ぐったりしないのは助かる」とあるが、このときの「ぼく」の様子を表したものとして最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選べ。

①　「ぼく」は悠花のピアノを弾く姿に見惚れてしまっていたが、素直にそう話すことはできず答えに窮してしまったが、特に気にする様子もないためほっとしている。

②　「ぼく」が悠花になぜ見ているのかと聞かれてしまい戸惑って返答に窮してしまったが、特に気にする様子もないためほっとしている。

③　「ぼく」がピアノを悠花が弾きながら歌う姿を見つめてしまっているため悪い意味で捉えられる可能性があるが、彼女はそれをしないことを「ぼく」は分かっているためほっとしている。

問三　傍線部(3)「悠花はどうして準備室なんかにいるんだろう。」とあるが、「ぼく」が得た疑問の内容はどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選べ。

①　悠花が音楽にそれほど感心もない「ぼく」に対して興味を持って音楽準備室に放課後来る理由がわからない。

②　悠花が「ぼく」に対して身体を寄せてきたり、甘えてきたりするほどの信頼を得る理由が分からない。

③　悠花と「ぼく」はクラスが異なっており接点がないにも関わらず、「ぼく」がいる音楽準備室に来てピアノを弾く理由がわからない。

問四　傍線部(4)「明らかにぼくたちの関係は今までとは違ったものになった。」とあるが、それはどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選べ。

① これまでとは異なり、「ぼく」が悠花に対して他の誰に対してへとも違う特別な感情を持つようになった。

② これまでとは異なり、悠花が時折「ぼく」へ身体を寄せてくるようになり、「ぼく」もそれを受け入れるようになった。

③ これまでとは異なり、「ぼく」が悠花の体温を感じ取ることが重要なことへと変わっていった。

④ これまでとは異なり、悠花の求めに応じて「ぼく」が彼女の頭を撫でたり頭を寄せたりするようになった。

問五　傍線部(5)「傍から見たらそれはとても奇妙な営みだったと思う。」とあるが、「ぼく」が考える「奇妙な営み」とはどのようなものか。次の選択肢の中から不適当なものを一つ選べ。

① 「ぼく」と悠花が特別な言葉を交わすこともなく、身体を寄せ合っていること。

② 悠花が音楽準備室でピアノを「ぼく」に聞かせていること。

③ 「ぼく」が悠花に抱きしめられ、そばにいることによる安心を感じていること。

④ 「ぼく」と悠花がクラスも校舎も違うにも関わらず、放課後に音楽準備室で同じ時間を過ごしていること。

問六　この問題文の作者をフルネームで書け。また、本文を読んだ感想を50字以内で記述せよ。